

優秀賞

「スポーツから学ぶこと」
—ライバル—

学習院女子高等科 二年

石 島 楓 子

今、私は途方に暮れている。長年に渡り苦楽を共にした『チームメイト』が、ある日突然、引退してしまつたからだ。私はアーティスティックスイミングの選手としてクラブに所属している。『その子』との関わりが始まつたのは、六年前同じチームになつた時だつた。『その子』は体付きが良く、運動神経も優れていた。天性の資質に恵まれ、コーチからは特別目をかけられていた。しかし、その事に対して胡坐をかいているような態度を取り続ける『その子』を、他の選手はあまり快く思つていなかった。

同級生ではあつたが、一年遅く競技を始めた私に対しての当たりは、格別に強かつた。意地悪なのか、嫌いだからなのかは分からないが、横柄で女王様気取りで気難しく、出来るだけ関わりたくない相手だつた。しかし、不運なことに、私達の身長はほぼ同じだつた。その為中学二年の時、デュエツ

トを組む事になつてしまつた。ソロやデュエツトは、望んでやらせて貰えるものではない。私は「見た目の相性が良い」という理由から、『その子』とデュエツトを組むチャンスを得たのだつた。感謝すべきことだとは分かつていた。しかし、一緒に過ごす時間が増えることが嫌で仕方がなかつた。年間約三百日も顔を合わせ、合宿や遠征先では同室となり、休憩までも一緒の時間に取らなければならない。『その子』は、練習嫌い、努力はしない、怒られるのももちろん大嫌い。私に対し、

「ちゃんとやらないで。私が怒られるから。」

と言う始末だ。おまけに、生活面も恐ろしく自己中心的。私は耐え難く、何度も考えつく限りの改善策を講じてみたが、歯の立つ相手ではなかつた。

デュエツトの練習期間は毎日のように家で泣き、「今シーズンが終わったら離れられるかも」と虚しい期待を抱きながら結果的には四年間、『その子』とのデュエツトが続いた。私は意を決して、

「デュエツトを辞めさせてください」

とコーチに伝えたことがある。

二人だからこそ全国で戦い、結果を残せる。仲良しでなくていい。割り切りなさい。」

それがコーチの答えだつた。「辛さ」と「上達」を天秤にか

け悩んでも、結論は出ないままだった。

しかしいつからだろう。『その子』と私の関係性が少しずつ変わっていったのだ。きつかけは分からない。お互いに成長したからなのか、一緒に居過ぎて『その子』に対する免疫が出来たのか。今思い返すと、六年間の思い出全てが辛く苦しかったとは言い切れないのだ。きつい練習を共に乗り越えた。結果に手を取り喜び、悔し涙も流した。見返せば、スマホのアルバムは『その子』との写真ばかりではないか。ここ一年くらいは「家族以上になんでも言い合える他人」と認め合う仲になっていた。

一カ月前の合宿の休憩時間、『その子』が唐突に私にこう言った。

「先に言っておくね。ごめん。」

私は意味が分からず、

「え、何のこと？」

「合宿が終わればわかるよ。ただ、先に言っておきたくて。」

これが『その子』との最後の会話だった。

今シーズンは、あと三つの大きな試合を控えていた。二人で表彰台に上がることが目標だった。練習が嫌いなことも、他に夢があることも、ずっと我慢して続けたことも、来シーズンには辞める決意をしていることも、全部知っていた。しかし、なぜ今、辞めたのか、未だに聞いていない。私だって

「今までありがとう」くらいは言いたかった。『その子』が引退したと聞いた瞬間、涙は出なかった。でも、泳ぎ始めると涙が止まらなかった。

私は小六から高二までの六年間、悩み続けた『その子』によつて気付かぬうちに生かされ、多くの経験を重ね、成長し、そしていつしか確かな情を通わせていたことに、今になって気付かされている。『その子』は意地悪ではなく、只々「正直で素直で嘘の無い子」だった。私は数えきれない程その率直さに傷つき、正直さに救われてきたのだ。そしていつからか『その子』は私にとって「唯一無二人」となっていた。

私が選手を引退した時、『その子』は私に何を思い、私は『その子』に何と伝えるのだろうか。心から「ありがとう」と言える選手生活を送りたい。それが、私が選手としてやり切った証であり、同時に私が彼女という「ライバル」から本当の意味で解放されることになると思う。もし私の願いが叶うなら、『その子』が「ライバル」から「信じあえる友」となりますように。